Nagoya City University Academic Repository

学位の種類	博士（看護学）
報告番号	甲第１８４０号
学位記番号	第２４号
氏名	遠藤 晋作
授与年月日	令和3年 3月 24日
学位論文の題名	先天性心疾患をもつ学童期までの子どもに対して母親が行う病気説明の構造 (The Structure of Disease Information Provided by Mothers to Their Children with Congenital Heart Disease until School Age)
論文審査担当者	主査： 堀田 法子 副査： 香月 富士日，明石 惠子，門間 晶子

氏　　名：遠藤晋作	
学位の種類：博士（看護学）	
学位記番号：第　24　号	
学位授与年月日：令和　3　年　3月　24　日	
学位授与の要件：学位規程第４条第１項該当	
論文題目：（和文）先天性心疾患をもつ学童期までの子どもに対して母親が行う病気説明の構造 （英文）The Structure of Disease Information Provided by Mothers to Their Children with　Congenital Heart Disease until School Age	
論文審査委員：	主査　教授　堀田法子
	副査　教授　香月富士日
	副査　教授　明石惠子
	副査　教授　門間晶子

博士論文要旨

1. はじめに

先天性心疾患をもつ子どもにとって、母親からの病気説明は重要な病気の情報源である。母親は子どもの成長に合わせて病気説明を行うが、子どもの学童期の成長にともなって病気説明に難しさを感じるようになり、学童期の後半以降の子どもの病気理解が不十分な現状が報告される。しかし、経過や影響要因、説明者である母親の病気理解を含めた病気説明の全体的な概念構造は明らかにされていない現状がある。

本研究の目的は、先天性心疾患をもつ学童期までの子どもに対して母親が行う病気説明の構造を学童期までの経過を踏まえて明らかにすることとした。その意義は、明らかにした概念から母親が行う病気説明の難しさを軽減するための支援を示唆でき、子ども自身が病気理解を向上し、セルフケアや自我同一性確立などの、疾患を持ちながら成長・自立していく上で重要な要素を補うことに繋がることにある。

第一研究-1

先天性心疾患をもつ学童期までの子どもに対して母親が行う病気説明プロセス

先天性心疾患をもつ学童期までの子どもに対して母親が行う病気説明プロセスを明らかにすることを目的とし、疾患をもつ 10～12 歳の子どもの母親 4 名に半構成的面接を行い、SCAT の手法を用いて分析した。母親は医師から病気説明を受け、自発的な情報収集を行うが断続・漸進的な理解向上しか望めず、子どもが学童期になっても理解追求が停滞する不全的な病気説明理解状態にあった。その背景には疾患衝撃による理解阻害、病気理解の追求困難、医師母親間の信頼関係形成困難があり、母親は幼児期までの子どもに対する日常生活に即した内容中心の病気説明を、学童期までに日常生活に即した内容と不十分な医学的知識が共存した病気説明に変容させていた。またその病気説明は成長に付帯する病気説明選択要因に影響されていたことが明らかになり、その具体的支援の示唆を得た。この成長に付帯する病気説明選択要因は子どもの成長発達と関連性があるため、学童期までの経過を踏まえて子どもに対して母親が行う病気説明の構造を検討するためには、成長発達が与える影響について、さらなる検討が必要と考えられた。

第一研究-2

先天性心疾患をもつ子どもに対する病気説明における母親の情報認識プロセス

母親が子どもの病気の情報をどのように認識しているのかは明らかにされていないため、母親による病気情報認識のプロセスを明らかにすることを目的とし、疾患をもつ 8～12 歳の子どもの母親 6 名に半構成的面接を行い（第一研究-1 の２次データ 4 名分含む）、SCAT の手法を用いて分析した。母親が病気情報の認識を不全的理解から説明実施可能へ移行するためは、理解の向上、必要性の認識、手段の確立の 3 つの条件が必要であることが明らかになった。これらを補うことが医療者による支援の針路となると考えられるが、特に必要性の認識に対する支援を母親は認識していなかったため、意識的な支援が必要となる。

第二研究

先天性心疾患をもつ学童の社会適応能力が母親による病気説明の実施基準に与える影響
－医学的知識の説明に焦点を当てて－

第一研究-1 より、断続・漸進的であっても「子どもの疾患について理解」を得ていくことと、「成長に付帯する病気説明選択要因」が病気説明の実施基準となると考えられた。また学童期の成長発達においては、知的な能力も含めて、子どもの広がっていく社会への適応能力が重視されていくと考えられる。さらに、第一研究-1 では、学童期の病気説明は日常生活

に即した内容と不十分な医学的知識が共存した病気説明であるため、特に医学的知識の説明が難しくなると考えられる。以上を踏まえ、不十分な医学的知識に焦点を当て、学童期の子どもの社会適応能力が母親による病気説明の実施基準に与える影響を明らかにすることを目的とした。疾患をもつ学童期の子どもの母親に無記名自記式の質問紙調査を行い、71 名より有効回答を得て、量的に分析を行った。子どもの社会適応能力は ASA 旭出式社会適応スキル検査（A.言語スキル、B.日常生活スキル、C.社会生活スキル、D.対人関係スキル）を用いて、病気説明の実施基準は第一研究-1 で明らかにした成長に付帯する病気説明選択要因をもとに作成した項目に、子どもがもつ病気に対する理解度を合わせた項目を用いて質問した。各項目、得点が高まると病気説明の実施基準が高まるように明瞭な言葉で表現し、当てはまりについて 6 件法で過去の経過を経た「今現在のこと」が評価できるように設定した。

病気説明の実施基準の因子分析の結果、第 1 因子「母親の説明コミュニケーション能力」、第 2 因子「子どもの説明受容力」、第 3 因子「子どもの説明アクセスリテラシー」が示された。このことから母親はまずは自らの説明コミュニケーション能力に依存し、そこに子どもの能力を合わせて説明実施を判断すると考えられた。そして抽出した因子を従属変数、社会適応スキル、交絡因子を独立変数とした重回帰分析の結果、第 2 因子「子どもの説明受容力」に対し、言語スキル、社会生活スキルが影響を与えていた。また第 3 因子「子どもの説明アクセスリテラシー」に対し、言語スキル、日常生活スキルが影響を与えていた。このことから①疾患ゆえに必要となる専門用語や表現を含めて、言語スキルの向上を図ることで「子どもの説明受容力」「子どもの説明アクセスリテラシー」の基盤を整える、②病気管理も含めて自分の身の回りこと自立して行えるように日常生活スキルを高めていくことで「子どもの説明アクセスリテラシー」を向上させる、③社会生活スキルを高めることで子どもの成長と共に広がりをみせる社会生活への適応を支持して「子どもの説明受容力」を向上させることが重要な支援であると考えられた。

全体考察

本研究では、まず先天性心疾患をもつ学童期までの子どもに対して母親が行う病気説明プロセスを明らかにした。またその中にある「病気についての理解」と、「成長に付帯する病気説明選択要因」が病気説明の実施基準となり、この病気説明の実施基準は子どもの社会適応能力に影響を受けていたことを明らかにした。そしてこのことから、子どもの成長発達に配慮した支援方法が示唆された。しかし、より対象に合わせた支援を実施するためには、病気説明を受ける側の子どもを対象とした検討が今後必要となると考える。

審査結果の要旨

先天性心疾患は、一般的に重症度が高く生命に関わる。近年では、その治療は急速に向上し、多くの疾患に対して修復手術が可能となり、良好な成績が期待できるようになっている。しかし重症疾患、複雑疾患の手術後では、さまざまな程度の問題が残り、手術後も長期的な経過観察が必要である。心不全などの身体的問題、小児医療から成人医療への診療体制の問題、子どもの病気理解についての問題、家族から子どもへのセルフケア移行の問題、就職・妊娠・出産・社会保障などライフイベントにともなう心理・社会的問題など様々な問題が指摘されている。なかでも子どもの病気理解は、必要なセルフケアを成長発達に合わせて子ども自身が行い、心理・社会的問題と向き合いながら適応し、思春期からの発達課題であるアイデンティティを確立していく上でも非常に重要な問題である。

子どもの病気理解がどのように進んでいくのかに着目した研究は少ない。先天性心疾患をもつ子どもの病気の情報源は、ほとんどが親で、その中でも母親が頼られている。また子どもは医師よりも親から提供された情報をより信頼するため、子どもにとって最も重要な情報源は母親からの説明であると考えられる。そこで、本論文は、先天性心疾患をもつ子どもに対して母親が行う病気説明の構造を検討し、成長発達に配慮した支援を示唆することを目的にした研究である。母親から子どもへ病気説明が進むことで、学童期から青年期にかけて、自身の病気を理解していくことはアイデンティティの確立に向けて重要な要素であることから、子どもにとっても母親にとっても非常に意義のある研究である。

第一研究-1 では、母親が行う病気説明プロセスを明らかにする目的で SCAT(Steps for Cording and Theorization: 大谷,2011）の手法により分析している。この手法は看護学の論文ではまだ少なく、構成概念を紡いでストーリーラインを記述し、理論記述していく方法である。母親は医師から病気説明を受け、「自発的な情報収集」を行うが「断続・漸進的な理解向上」しか望めず、学童期になっても「理解追求が停滞する不全的な病気説明理解」であり、母親の病気理解度と子どもの「成長に付帯する病気説明選択要因」が病気説明に影響していた。この結果から、母親自身が子どもの病気理解が進まないことに加え、子どもの成長に付帯する要因が影響して、子どもへの病気説明が進まないという、病気説明プロセスが非常に分かりやすく、病気説明プロセスの中でどこが問題になるかが理解できるものであり、分析方法を含め非常に評価できるものである。

第一研究-2 は、母親が子どもの病気の情報をどのように認識しているのかを明らかにする目的で、SCAT の手法により分析している。母親の病気説明について、不完全理解を説明実施とするためには、理解の向上、必要性の認識、手段の確立が必要であることを明らかにしている。この結果は、予測できるものではあるが、確認のために行ったものであり、再認識させられた内容である。

第二研究では、第一研究で明らかにした病気説明プロセスから、母親の「病気についての理解」および、「成長に付帯する病気説明選択要因」が母親の説明実施基準であると考えら

れる。さらに、その基準は学童期の子どもの社会適応能力と関連があると考えた。学童期は、他人と並んで、あるいは他人とともに行動することを含む勤勉性が発達するため、学校に入り、学習や知的活動、友人づくりにエネルギーが注がれ、知的な能力も含めて、社会への適応能力が重視される。また第一研究-1 から、学童期の病気説明は「日常生活に即した内容と不十分な医学的知識が共存した病気説明」であることが明らかにされため、第二研究では、母親の「病気についての理解」は、不十分な医学的知識に焦点を当てた。母親の「病気についての理解」「成長に付帯する病気説明選択要因」をもとに病気説明実施基準の質問紙を独自に作成した。また子どもの社会適応能力には、社会適応スキル尺度を用い、先天性心疾患をもつ学童期の子どもの母親に無記名自記式の質問紙調査を行い、71 名より有効回答を得て量的に分析を行った。結果、病気説明実施基準は、因子分析により第 1 因子「母親の説明コミュニケーション能力」第 2 因子「子どもの説明受容力」第 3 因子「子どもの説明アクセスリテラシー」が示された。母親の病気説明実施には、「母親の説明コミュニケーション能力」が最も重要な要素であることが示された。子ども側の要因である第 2 及び 3 因子を各々従属変数とし、社会適応スキルを独立変数とした重回帰分析より、「子どもの説明受容力」は言語・社会生活スキルが、「子どもの説明アクセスリテラシー」は言語・日常生活スキルが関連していた。

母親の説明実施を高めるためには、まず母親自身が説明コミュニケーション能力を高めることが必要であることが明らかになった。また子どもの説明受容力、子どもの説明アクセスリテラシーを整えるためには、子ども自身の言語スキル、日常生活スキル、社会生活スキルなどの社会適応能力が関連していたことも明らかとなった。子どもの社会適応能力の発達に配慮した支援を行うことで、母親が子どもに行う病気説明支援の具体的な方法を導き出す視点となった。そして子ども自身が病気を理解していくことができ、セルフケアやアイデンティティが確立し、疾患を持ちながら成長・自立していく一助となると考える。

本研究は、幼児期から学童期にかけて、母親から子どもに対する一連の病気説明プロセスが明らとなり、難しい病気説明支援に繋がる、非常に意義のある研究であると評価された。さらにそのプロセスから、母親の病気説明基準を明らかにしたこと、その基準と子どもの社会的適応スキルに関連があったことを導き出したことは、子どもの成長発達に沿った支援に繋がると考えられ、今後の子どもの病気説明支援の質の向上に寄与する有用な研究成果と考える。

以上により、本論文は、本学学位規程に定める博士(看護学)の学位を授与することに値するものであり、申請者は看護学における研究活動を自立して行うことに必要な高度な研究能力と豊かな学識を有するものと認め、論文審査並びに最終試験に合格と判定する。